しかし、眞の意義は、自分が心身を社會の爲めに消耗し得る効果について幾分有効な地位に居ると云ふに過ぎない。苦學してある資格を得ること、それはたゞ身の修養たるに過ぎない。その修養を積んだと云ふ丈けでは、社會的に、國家的に意義をもたないのである。世には我が子の頭腦がよいとか、勉强に勤しむとかを、無上の幸福の樣に考へて居る親もあるが、頭腦亂雜で、怠惰なものに比しては幸福であるに違ひないが、しかし頭腦のよいのも、研究に勵むのも社會に盡す爲めの素質、手段準備に過ぎないのである。それ自身の價値としては修養上の價値に過ぎない。社會的には價値は發生しないのである。

或る日、この有望な青年と食堂で話した事がある。青年は私の眞の生活はこれからだといふ意味の言葉を洩らした、私は再び喜んだ。再び感謝した。世に苦學などする青年は、とかく精神にひがみを生じ、意氣地がない傾きがあるが、この青年には、どこにもひがみらしい暗影を認めなかつた。更に、此青年は、今までの修養は、社會の爲めに盡す準備であり、修養であると深く信じてゐるらしく見えた。そして、公人として、社會國家の爲めに盡す決心の程が窺はれた。そして、彼は試驗登第などを少しも意にとゞめて居ない。一心不亂又公務に勵んで、國家社會の爲めに盡さとう決心して居るのであつた。

私の喜ぶのも無理はない。

松村介石先生の「立志の礎」の大精神はどんなに多くの人間を明るい方面に策進せしめたか知れない。又將來も、永へに多くの人間を陶冶し完成するか知れない。しかも、「立志の礎」の根本は、形式的な、外形的な成功でなく、人生の根本にふれた眞の人間たらしめる點に存して居る。「社會の一角に立志の礎」に激勵せられて、國家有用の材となる青年のあることを思ふとき、又、刹那的な成功に鼻うごめかす青年の多いことを思ふとき、「立志の礎」と

「道」第177号（1923.1）

この青年とを對照して感懷無量なものがある。

私達青年には幾通りの風格もある。

安逸遊惰、醉生夢死、無爲徒食の人はその一類である。

努力、奮鬪、向ふ見ず、側目もふずに教科書に沒頭して居る者も一つの類である。

學校の教科書を放擲して、其本業でもない音樂、美術、文學をあさりあるいて、學生らしくない態の青年も一類である。

宗教の法味を解しない無味な生活に、馬車馬らしい生活をのがれ、暇あれば學び、暇あれば祈り、暇あれば社會、國家の爲めに盡す悠々たる態ある青年こそ、彼の青年であらう。私も公けの一部、公けも私の一部、公私合一の所に眞の生活がある。

レニン・ガンディ・ケマル

大川周明

一

レニン、ガンディ、及びケマール——此等の三人は、世界の表面に現はれて、偉大なる事業を遂行しつゝある魂、世界史の新しき頁を書きつゝある英雄である。時代は英雄を生むと云ふことの眞實が、彼等によつて立證されて居る。何となれば、彼等を生めるもの、更に適確に言へば、彼等に活躍の機會と

舞臺とを與へたものは、世界戰に他ならぬが故である、同時に、英雄は時代を生むと云ふことの眞實も、亦彼等によつて立證されて居る、何となれば、彼等の努力精進によつて、新しき時代が招徠されつゝあるが故である。

世界戰至奥の意義が、革命歐羅巴と復興亞細亞とを、五年に亘る混沌、苦惱の間から生み落すにありしことは、吾等の堅く信じて疑はざる所である。而して此の二つのものを象徴して居るのが、即ち彼等三人の丈夫である。革歐羅巴に其の最後に落在する所が如何なる相を取るにもせよ、先づ資本主義に對する社會主義の勝利、換言すれば階級鬪爭に於ける勞働階級の勝利として、最初の第一歩を踏み出すことは、極めて當然の論理である。復興亞細亞は、歐羅巴の奴隷たる亞細亞民族の獨立、並に歐羅巴壓抑の下に在る亞細亞諸國の眞個の自由、換言すれば民族爭鬪に於ける非白人の勝利として現はれることは、同じく必然の勢ひであり、現に爾く進みつゝある。

かくして世界戰は、明白に來る可き世界革命の序幕である。而して來る可き世界革命は、其の本質並に範圍に於て、人類の未だ曾て知らざる深刻にして廣汎なるものである。その第一に於て、歐羅巴自身の革命である。何となれば、歐羅巴今日の共同生活の組織が、其の根柢に於て否定され、新しき原則の上に新しき社會秩序が樹立されやうとするが故である。第二には、文學の示す如く、そは世界全體の革命である。何となれば、歐羅巴の利益、而も歐羅巴の物質的利益を根本原則として組織されて居る世界が、同じく根柢より改められて、人類其者の向上登高を原理とする、新しき國際關係が出現しやうとするが故である。此の雄渾森嚴なる世界の過度時代に於て、最も勇敢なる人類の戰士として、吾等の前に其の偉大なる姿を現はし、無限の教訓を垂れつゝあ

る者が、取りも直さず露西亞・印度・土耳古に於ける三人の大丈夫である。

二

單に之を表面に就て見るも、三人の志業は、眞に驚嘆に値する、第一に驚くべきはレニン金剛の努力である。不斷に內外兩面の敵と戰ひ極度の飢寒に苦しめられ、屢々沒落の危機に瀕しつゝ能く一切の難局を透貫し、困難其者の裡より常に新しき力を得來り、混沌其者の間より强大なる政治的並に軍事的機關を組織して、終に新しき社會秩序の基礎を築き上げたレニンの勇猛精進は、實に人間の力の奇蹟である。

彼によつて代表せらるゝ露國革命の價値は、其の社會的價値に存するに非ず、また現在の勞農政府の存續如何に存するのでもない。吾等に取りて最も重大なる教訓は、レニンの號令の下に、一個偉大なる國民が、徹底して過去の制度を顚覆し、全然新しき社會秩序の創設のために、全力を擧げつゝあると云ふ事實其ものである。而して此の事實の根柢に潛む確信と勇氣とである、古へより今に至るまで、眞に人類の向上を激成せるものは、是くの如き確信と勇氣とであつた。

加ふる、レニンは、歐羅巴精神の權化たる點に於て、大いに學ぶべき所である。希臘思想と基督教とに養はれ、更に近き科學によつて鍛えられたる歐羅巴精神は、其求むる所の自由、其の希ふ所の平等、其の抱く所の友愛を、最も美事に實現すべき共同生活の組織制度の發見並に確立のために、高貴なる努力を續けて來た、佛蘭西革命の期する所、また實に此外になかつた。そは民主々義の精神に則り、政治的自由と法律的平等との制度を確立して、人類の向上を圖らんとしたのである。佛蘭西革命が、世界史に偉大なる貢獻ありしは、更めて說くまでもない。而も

其後百年ならずして、吾等の現に見るが如き社會的平等、經濟的掠奪、黄金と器械との唾棄すべき支配が、却つて世界を地獄たらしめんとするに至り、茲に理性と科學との力を恃み、經濟組織の革命によつて共同生活の福祉を實現せんとする社會主義の唱道となり、レニンは、其の徹底せる實行を敢てしたのである。故にレニンは、其の魂の全力を擧げて、外面的制度の確立、器械的、自働的な人類の福祉を生み出だすべき組織の實現に傾倒しつゝある。

吾等の眞に知らねばならぬことは、社會主義其もの、是非善惡に非ず、レニン其人の成功失敗に非ず、實に彼れの努力の中に抱有せらるゝ歐羅巴精神の意義、並に彼の努力によつて指示されて居る歴史の方向である。

三

レニンを去つてガンディに參ずれば、同じく人類の戰士であり乍ら、實に白雲萬里の感なきを得ぬ。而してレニンとガンディとの相違は、歐羅巴精神と亞細亞魂との相違に他ならぬことが、限りなく吾等の心を惹く。ガンディの志す所は、印度の解放である。而も此れの論理は、彼れの夫れと全く根抵を異にする。ガンディ渾身の努力は、印度に於ける英國統治の掃蕩に在る。而も此れの戰術は、彼れの夫れと截然として似もつかぬ。

ガンディは、レニンと異なり、曾て革命を口にしない。ガンディは國家の組織、社會の制度に就て、更に言及する所ない。彼れの說く所は、印度人の魂の解放である。其の期する所は、印度人をして眞理に即する正善の生活を實現せしむるに在る。英國の印度統治は、印度人を奴隷とするが故に、即ち印度人の人格を否定し、其の道德的獨立を奪ふが故に、印度に於ける善惡の源である。英國統治が印度に齎らす所の物質的幸福の如きは、固より問題しない。

假令英國が、印度人に如何なる物質的幸福を與ふるにもせよ、印度人の人格を蹂躙し、根本に於て之を物として取扱ふ時に、其れが果して何を意味するか。是くの如き幸福に滿足するものは、美衣と美食をも與へられて喜悅する妾婦の徒である。故に此の善惡の源は、斷乎として除去せねばならぬ。

而もガンディに從へば、此の邪惡と戰ふに、決して暴力を以てすべきでない。レニンが、一切の權謀術數を辭せず、流血殺戮を辭せざる時、ガンディは即ち惡を英國と共にせざることより戰ひを始めよと說く、之の爲に彼は、主力を盡して眞個の人間としての自覺を印度人の魂に喚起し、之によつて彼等の現狀の忍ぶ可からざる所以を悟得せしめ、而して之を脫出せんとの精神的勇氣を振作せしめんとするのである。英國皇太子が、印度を巡遊せる時、同志の或ものは之に暴力を加へんことを主張した。ガンディ、敢然として之を斥け、諸公にして其の決意を翻さゞる間、予は食を絶たんと宣言して、斷食三日に及び、遂に同志をして陰謀を放棄せしむるに至つた。彼れの制止なくんば、英國皇太子の安危、決して逆睹し難かつたのである。印度官憲は、英國皇太子一度び印度と離るゝや、此の恩人を捕へて牢獄に投じた。而もガンディは怨む所なく、憎む所ない。

眞理把持を主義とし、暴力によらざる非協同を原則とするガンディの運動が、如何に印度人の魂を深く且汎く支配するに至りしかは、此處に說くを須ゐぬであらう。印度の如き政治的事情の下に、箇程迄で廣汎なる國民運動の發展がガンディによつて遂げられたと云ふことは、レニンの場合と同じく、一個の奇蹟として驚異するに足る。

レニンとガンディが最も甚しき對立をなし乍ら、而して最も異なれる方法によつて戰ひ乍ら、等しく非常なる大業を成就しつゝあることは、表面極めて不可思議に見たるに拘らず、更に奥深く辿り往けば、

寧ろ正當なる理由の存するを了得するに難くない。ガンデイの運動が、火の原を燎く如くなる所には、其の掲げる所の理想が、適確に印度的であり、其の執る所の戰術が、徹底して印度的なるが故である。一切の腐敗と墮落とに拘らず、吠陀讃頌に最初の魂の聲を表現して以來、印度の求め來れる所は、實に深奥幽玄なる精神的原理の體得であつた。精神の高根の絶巔を窮むることに比ぶれば、塵の世の總ては第二義のものとせられ、之に執着することは厭ふべき煩惱として斥けられて來た。獨り印度のみならず亞細亞全體が、多かれ少なかれ此の基調の上に立つ。亞細亞に純乎たる科學的研究の起らざりし所以、社會制度の周到緻密なる研究の起らざりし所以は、其の最後の原因を此處に求めねばならぬ。

故にガンディ以前、西歐の革命主義に則り、西歐の革命運動に倣つて起てる幾多印度志士の努力は、西歐教育を受け、西歐精神を呼吸せる青年を感激せしむるに足りたが、遂に排英運動を眞個に國民的たらしむるを得なかつた。ガンディ出でゝ、精神的指導者として起つに及び、國民は翕然として彼れの指揮を仰ぎ、精神運動が國的に政治的革命運動たるに至つたのである。故にカンディの目的は、印度が露西亞に非ざる限り、レニンと同一戰術によつて遂げらるべくもない。從つて其のレニンと全く趣を異にせる所以が、即ちガンディの勝利の原因である。

四

印度を去つて土耳古を望めば、ムスタファ・ケマルが、秋霜の劒を提げて三軍に號令して居る。彼れの面目は、レニンの如くならず、またガンディの如くでない。ケマルとは、土耳古語に『眞直』を意味し、彼が年少サロニカの陸軍幼年學校に學べる頃、彼を愛撫せる數學の教師ムスタファが、純一率直なる彼れと同名の學生の爲人を愛でゝ、選んで與へた

名前である。二十二歳にして士官學校を出で、陸軍少尉として軍隊に入つてから、四十二歳の今日まで、彼は其名の如く、眞直に軍人として終始一貫した。レニンは、日露戰爭當時に於て、既に其の鋭き鋒鋩を現はし、明石將軍の如き、彼が必ず大事を成すべきを豫言して居たとのことである。ガンディは、十數年に亘る南阿の善戰健鬪によつて、其の崇高なる人格が世に知られて居た。世界戰の當初、詩人タゴルと共に日本に來りし英人ピアスンは、ガンディの名が未だ曾て日本人の口に上らざりし頃、既に印度の救世主たるべき者として、絶大なる期待を彼に屬して居た。ケマールは之と異なり。固より彼が軍人としての才能は認められて居た。殊に世界戰に當り、第十九師團長として、ダーダネルスの戰に英軍を擊退して偉勳を頭はしてから、彼れの軍事的天才は土耳古全國に認められたけれど、而も此時でさへ、土耳古の存亡、回教徒の政治的興廢が、彼れの双肩に荷はせられて居たことは、恐らく何人も想到せざりし所であつた。彼れの使命が、露に堂々と現はれたのは、土耳古が衰頽のドン底に陷つた時、青年土耳古黨の三首領タラート・エンヱル、及びジェマールが、敗軍の將相として沒落せる時であつた。

聯合軍と土耳古との間に休戰が成立した時、ケマルはバレスティナの戰線にアレンビー將軍と戰つて居たが、休戰の電報に接して君府に歸り、聯合軍の横暴を目擊し、且君府に止まりて策の施こすべきなきを知り、アナトリアに赴きて事を擧げ、土耳古國民主義の最後の戰士として、勝利に誇る全聯合國に堂々と挑戰した。此時に於てケマルの旗下に集れるものは、彼れの人格と才幹とに傾倒し、且彼在るによつて土耳古復興の可能なるを信じたる若干の同志に過ぎず、世界は唯だ其の無謀を笑ひ、或は唯だ其の志を憐んだ。ケマルの宣言は、簡潔明瞭である。曰く『吾等は敵に强ひられたるが故に戰ふ。何とな

れば吾等の敵は、吾等自身の國土に於て、吾等を奴隷たらしめんとするが故である。吾等は、自身の國土に於て、獨立を要望する。こは一切の國民に賦與せられたる權利、一國が他國に拒むことを許さぬ權利である』と。かくて三年の後、遂に能く土耳古復興の基礎を築くを得た。彼なくば、土耳古は明かに世界地圖より抹殺せらるべき運命に在つたのだ。

さて土耳古に於て、偉大なる軍人及之に率ゐらるゝ軍隊が、國民的權利並に自由の戰士として、國民運動の中心となりしことは、極めて當然の論理である。サア・ウィリアム・グレゴリ、曾て埃及に於けるアラビ・バシャの運動を論ずるに當り、下の言をなした。曰く『東方諸國に於て、政治運動の主體は、常に軍人である。彼等のみが能く其の目的を遂行すべき統一と勇氣とを有する。其他の人民は、殆ど不平さへも漏らし得ずに、毛を剪られ肉にせらるゝ羊の如である』と。波斯・埃及・土耳古の如き國家に於て、グレゴリの言は適確に肯綮に當つて居る。殊に土耳古の場合に於ては、一九〇八年の革命も、今度の勝利も、共に軍人並に軍隊によつて行はれた。かくて土耳古の救濟者が、勞働階級の戰士に非ず、精神運動の指導者に非ず、軍人の間に出でたことは天意眞に測るべからざるものあるを想はしめる。

五

吾等は、世界史の新しき頁を書きつゝある三人が、戛然として獨自一己の途を歩んで居る事實の意味を明瞭に把握しなければならぬ。數年以前、革命を標榜せる日本青年の間に、聲高く唱はれた歌がある。其の一つの歌は

『レニン・トロツキは何故來んぢやろか
來られたら來るぢやろが、來られんけん來ん』

と言ふのである。日本は、改造されねばならぬことに、恐らく心ある者の異存はなからう。さり乍ら、

此の大業は、レニンの模倣者によつて遂げらるべくもない。レニン・トロツキを呼ぶ心其ものが、革命家として適はしからぬ奴隷的根性である。日本は露西亞でない。レニンの直譯によつて新日本が出現すべしと考ふる如きは、根もなき夢想である。社會主義は多くの眞理を含む。改造日本が幾多の社會主義的要素を取入れねばならぬことは言ふ迄もない。而も直譯社會主義によつて、直ちに日本が物質的に救濟されると言ふ如き主張は、宛も憲法發布前後の牧師が、直譯基督教を以て、日本を精神的に救濟する唯一の途なるかに主張したと同樣、身の程知らずの好一對である。

一方レニンに心奪はれたる一群あるに對し、他方には專らガンディを崇拜して、日本の改造は先づ魂の革命から始めねばならぬと疾呼する一團がある。ガンディは疑ひもなく一個の大丈夫なるが故に、之を崇拜するは何の不可ない。子自身も亦崇拜者の一人である。さり乍ら、日本改造の大業に於て、印度に適合せるガンディの方法を、直ちに日本に直譯せんとするは、其の可なる所以を見ざるのみならず、前者と等しく恥づ可き模倣である。今日ガンディに倣つて精神的革命を說く者を見るに、竟に在來の陳套なる談義說法の埒外に出でぬ。善爲すべし、惡爲すべからずと言ふが如き、抽象的道德を、如何に高聲に唱へたところで、日本の改造は期待すべくもない。日本に取りて何が眞に惡であり、何が眞に善であるかを說かなければ、唯だ抽象的に正義を高調し、其の具體的內容を明示しなければ、要するに空々寂々に歸する。

固より國民に正邪善惡を明確に意識せしむることは、極めて必要である。故にガンディに傾倒する人は、英國統治が印度に於ける萬惡の本なるを指摘し彈劾せる如く、日本の現實生活に於て、邪惡の根源となりつゝあるものを、ガンディの如く畏るゝ所な

く爬羅抉剔し、目的に求むべき正義を明かに揚げてやらねばならぬ。

六

吾等は、レニンに於て學ぶ可きものとして、彼れの努力のうちに含まるゝ歐羅巴精神を擧げた。其の精神とは、實に組織の精神である。組織若くは外面的制度のみを重んずることは、幾多非難すべきものあるに拘らず、吾等亞細亞諸國の必ず學ばねばならぬ點である。政治的理想の闡明に於て、亞細亞は斷じて歐羅巴の後に落ちない。而も之を實現する方法の具體的研究に於て甚だ貧弱である。例へばガンディの場合に於ても、善き魂は至然に善き制度を生むと嘯いて居る。乍併吾々日本人は、最も歐羅巴に傾倒する人は、英國統治が印度に於ける萬惡の源なるを指摘し彈劾せる如く、日本の現實生活に於て、眞に邪惡の根源となりつゝあるものを、ガンディの如く、畏るゝ所なく指彈し、同時に求むべき具體的正義を明示しなければならぬ。

吾等は、日本改造の秋が、次第に迫りつゝあるを思ふ。而して此の大業は、レニンに倣はず、ガンディに倣はず、ケマルの跡を蹈まず、日本精神の眞個の體現者によつて、日本的に斷行せらるべきを信ずる。そは一人であるかも知れぬ、また一團であるかも知れぬ。吾等は、是人の如き者の既に儼存して、天の召喚を待ちつゝあるを信ずる。そは今日に於て、夜盜の如く隱れて名もなきものであるかも知れぬ。而も機運熟しなば、電光の如く現はれて、其の使命を果たすであらう。

物に觸れて（承前）

藤本房次郎

四　墓

洛西小倉山の麓に、芭蕉の嵯峨日記で名高い落柿舎が、今も去來の住んだ當時のまゝに殘つてゐる。晩秋の或日茲を訪れた。當時の柿を偲ばす樹が紅葉して、寂びた、わびしい幽境に一味の華かさを添へてゐる。去來の人格に觸れたやうな閑寂な奥床しい庵である。蕉翁去來師弟の交情や、日記にある二人のあの時の生活を心に描き乍ら、裏へ廻ると竹藪の片隅に去來の墓がある。是はまた何としたさやかな墓石であらう。連れてゐる六つの我が子の膝頭までしかない程の高さの石である。兩手で易々と提げ得らるゝ程の自然石に「去來」とたつた二字だけ飄逸な行書で彫り込んである。自筆に係るものださうな。蕉翁門下十哲の内でも、最も詩人的天分の豐かな人格の高逸恬淡な、去來其の人がいかにも此の無雜作なはかなげな石碑に現はれてゐるやうである。

我が亡骸が理められてあるとのしるしが必要ならば、かかる墓でいゝのだ、是でいゝのだと深く誨へられるやうに思へた。私は此の嵯峨村へ移る前は、黒谷眞如堂の附近にゐた。兩方とも京でも有名な墓地で、新舊大小樣々の墓石が累々とならんでゐる。朝に夕に、好んで其處を逍遙しつつ、墓が齎らす一種の氣分に浸りて、死とか生とか、有や無の問題に